

『熊本大学教育実践研究』臨時増刊号の刊行に寄せて

教育学部長 八 幡 英 幸

本年度、本学部附属教育実践総合センターの編集による『熊本大学教育実践研究』は、第35号を刊行する運びとなりました。毎年同誌には、本学部教員に加え、附属学校園教員、大学院生、教員研修留学生などの執筆による論文及び実践報告、研究ノートが多数投稿されています。私自身も、熊本市教育センターにおける教員研修に関する実践報告、韓国と日本の道德教育に関する教員研修留学生との共著論文などを同誌に掲載していただいた経験があります。

同誌の特徴として、校正・編集作業の緻密さがあります。また、同誌に掲載された論考は熊本大学学術リポジトリ (<http://reposit.lib.kumamoto-u.ac.jp/>) に登録され、世界中どこからでもアクセス・ダウンロードできるようになり、アクセス数・ダウンロード数の統計も随時参照できるという利点があります。

本年度は、附属教育実践総合センターのご厚意により、通常の号（第35号）に加え、「新たな学びのデザイン集」と題した臨時増刊号を刊行していただくことになりました。「新たな学びのデザイン」は、昨年度から本学部における教育研究推進のキーワードとして用いている言葉です。

これまでにこのテーマで開催した交流会では、「新たな学び」とは何か、なぜ今「新たな学び」なのかについて、様々な見方・考え方があることが明らかになっています。この点については、いたずらに結論を急ぎ、特定の理論または方法による統一を図るよりも、多様な見方・考え方を持つ研究者・実践者が交流し、対話を深める中で、それぞれの理論と方法の純度を高めていくことが重要だと考えています。「新たな学びのデザイン」が、そのような対話の場を開くための合言葉になれば幸いです。

周知の通り、近年の学習指導要領改訂をめぐる動きの中で、「課題解決に向けた主体的・協働的な学び」「アクティブラーニング」「主体的・対話的で深い学び」など、様々な言葉が用いられました。そのような中で、学習指導要領改訂に関わった専門家からは、一つ一つの言葉に踊らされず、何のための改革なのかをしっかりと見極めることが大切であるとの指摘がなされています。

特に、教員養成大学・学部は、そのような観点から、教育の本質を踏まえ、かつ、時代や社会の変化に対応した「新たな学び」の姿を地域の教育現場に対して示していく必要があります。そのために、本増刊号を含む『熊本大学教育実践研究』が、本学部及び附属学校園の取り組みについてのより一層豊かな情報発信の場になることを願い、巻頭の言葉とさせていただきます。

2017年12月